

なつやすみ 平和映画上映会

ティダ、それは太陽を意味し、
その昔「リーダー」を表す言葉だった



第4代沖縄県知事
1990～1998
大田 昌秀

第7代沖縄県知事
2014～2018
翁長 雄志

佐古忠彦 監督作品

ティダ 太陽の運命

琉球放送創立70周年記念作品

監督:佐古忠彦 撮影:福田安美 音声:町田英史 編集:庄子尚慶 語り:山根基世
音楽:兼松衆 阿部玲子 澤田佳歩 佐久間奏 栗原真葉 三木 渥 選曲・サウンドデザイン:御園雅也
音楽制作プロデューサー:水田大介 音響効果:田久保貴昭 プロデューサー:小濱 裕 嘉陽 順 嘉手納央輝 米田浩一郎 松田崇裕 津村有紀
テーマ曲:「艦砲めくえー残さー」 作詞・作曲:比嘉恒敏 劇中歌歌唱:でいご娘 / エンディングテーマ演奏:辺土名直子
2025年/日本/日本語 カラー(一部モノクロ)ビスタ/5.1ch/129分
制作:琉球放送 TBSテレビ 配給:インターフィルム ©2025映画「太陽の運命」製作委員会



平和を追い求め、理不尽に抗い、信念に生きた二人の男——その熱き闘いの記録

8/11 (火・休日)
入場無料

会場: 愛隣館 野の百合保育園 ホール

上映時間 ①9:45～ ②14:30～ ③18:00～

大田昌秀 (1925~2017)

社会学者、沖縄戦研究者から革新統一候補となり、1990年知事に当選。95年9月、米兵による少女暴行事件が発生、直後から「日米地位協定」の見直しを訴えた。翌月、沖縄県民総決起大会に参加し、日米両政府に誠意ある対応を強く求めた。翌96年、橋本龍太郎首相から「普天間基地全面返還」の言葉を引き出す、県内移設が条件となっていたため実現せず、そのことが長い時をへて翁長が苦悩する「辺野古移設問題」の発端となった。

翁長雄志 (1950~2018)

保守の立場から大田県政を厳しく批判し、退陣に追い込んだ。四期務めた那覇市長時代に、民意を顧みず辺野古埋め立てを強行する安倍政権に異議を唱えてかつて所属した自民党と対峙。保革の対立を乗り越えることを目的とし、2014年、知事選に出馬して当選。大田の3代後の知事に就任した。革新勢力も含めたオール沖縄をバックに高い求心力を誇った。

おおたまさひで おながたけし

大田昌秀と翁長雄志…二人の知事が相剋の果てにたどり着いた境地、そしてこの国の現在地とは——。

政治的立場は正反対であり、互いに反目しながらも国と激しく対峙した二人の沖縄県知事がいた。1972年の本土復帰後、第4代知事の大田昌秀(任期1990~98年)と第7代知事の翁長雄志(任期2014~18年)である。ともに県民から幅広い支持を得、保革にとらわれず県政を運営した。大田は、軍用地強制使用の代理署名拒否(1995)、一方の翁長は、辺野古埋め立て承認の取り消し(2015)によって国と法廷で争い、民主主義や地方自治のあり方、この国の矛盾を浮き彫りにした。大田と翁長、二人の「ティダ」(太陽の意。遙か昔の沖縄で首長=リーダーを表した言葉)は、知事として何を目指し、何と闘い、何に挫折し、そして何を成したのか。そこから見えるこの国の現在地とは——。

佐古忠彦監督が沖縄現代史に切り込んだ、新たな野心作

沖縄戦後史を描いた「米軍が最も恐れた男 その名は、カメジロー」2部作(2017/19)、戦中史を描いた「生きる 島田叔一戦中最後の沖縄県知事」(2021)に続く佐古忠彦監督最新作は、それぞれの信念に生きた二人の知事の不屈の闘いをたどり、その人間的な魅力にも光を当て、彼らの人生に関わった多くの人々の貴重な証言を交えて沖縄現代史に切り込んだ、全国民必見のドキュメンタリーだ。

太陽の運命

監督:佐古忠彦 語り:山根基世

2025年/日本/日本語 カラー(一部モノクロ)ビスタ/5.1ch/129分 制作:琉球放送 TBSテレビ
配給:インターフィルム ©2025映画「太陽の運命」製作委員会

沖縄には日本の矛盾が詰まっている

筑紫哲也

主催 社会福祉法人 イエス団 京都ブロック

お問い合わせ先: 愛隣館研修センター

TEL: 075-621-3849

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町151-34

・近鉄電車「向島」下車 徒歩10分 ・京阪電車「親月橋」下車 徒歩20分